

## 蹄齋北馬「相愛の図屏風」と礼楽思想 —近世の思想空間からみる春画—

鈴木堅弘（京都精華大学・非常勤講師）

蹄齋北馬筆の「相愛の図屏風」（個人蔵）は、縦139.2cm×横169.4cmにおよぶ等身の肉筆春画である。江戸時代に制作された春画のなかでも、最大規模の大きさである。屏風仕立ての春画は極めて珍しく、二曲一隻の全面に男女の性愛画が描かれている。また北馬の春画は、これまでに数点しか報告されておらず、肉筆春画史のうえでも重要な作品といえる。しかし、本屏風は、昭和39年（1964）に刊行されたシャルル・グロボア『Shunga春画』において図版紹介されて以降、所在不明等の事情により、目立って考究の俎上にのせられることがなく、制作年代の特定、制作の歴史経緯、さらには春画屏風としての機能的側面の考証はほとんどなされていない。

また本屏風は、第35代平戸藩主・松浦熙（1791-1867）の別邸偕楽園に伝来し、そこで暮らしていた熙公側室の幾世の方への贈答品であると言い伝えられてきた。しかし本作は、現在、平戸松浦家および別邸偕楽園に所蔵されるものではなく、近年まで所在も明らかにされないままに、平戸藩主との関連のみが伝承の類いとして口伝されてきた。

そこで本発表では、平戸偕楽園に所蔵される『偕楽園御道具帳』（元治元年〈1864〉）等の歴史資料を繙くことにより、本屏風が平戸松浦家に伝来し、松浦熙公ゆかりの什宝であることを立証する。くわえて、本屏風が描かれた制作年代を、風香寺（平戸）に遺る幾世の日記『観峰年表』（写本）を読み解くことにより検証し、江戸時代の諸藩大名が春画をどのように利用していたのか、その歴史経緯を明示する。

さらに本屏風の特色は、市河米庵（1779-1858）筆による「楽字屏風」（個人蔵/本屏風と同所に所蔵）と対なる屏風として制作・活用された点にある。「楽字屏風」（二曲一隻）は、本紙中央に大きく「楽」の隸書を記し、四隅に「万歳、千秋、未央、米庵」の草書を記した書画である。その寸法は、「相愛の図屏風」と同一であり、『偕楽園御道具帳』等の歴史資料から、双方の屏風が一对であったことが確認できる。そこで本発表では、この「楽」の字義と「春画」が一对とされた意味を、近世の思想空間における「礼楽思想」から読み取ることを目的とする。その際に、江戸時代の藩主が礼楽思想を政教倫理の教えとして遊楽の場に取り入れた事例を示すと共に、従来の春画研究ではほとんど取り扱われてこなかった近世儒学と春画の関連性を提示する。とくに、山鹿素行、熊沢蕃山、伊藤仁斎、荻生徂徠による色道肯定の言説を取り上げ、それらの言説が、『礼記』・『荀子』・『老子』の儒書に明記された「楽事」への思想を基にしていることに着目する。そのことで、儒教由来の礼楽思想が儒者と大名の交流を通じて近世の春画を生み出す温床のひとつになったことを明らかにする。